

林徳寺の歴史 ③

第2号（平成14年1月1日発行）から続く

林徳寺第12代住職 乗空は、幼いころより学問を好み研鑽に努め、近郷の知識人の一人に数えられたという。特に俳諧の道に優れて、茶筌坊蕉園と号して近郷の同好者を指導した。また、6代覚乗の時代に当山に松尾芭蕉が立ち寄ったという伝説を記念して、芭蕉の直筆を基に門人と共に句碑を建立し、毎年9月18〜19日に盛大な芭蕉祭りを行った。

この句碑には、『稻妻や 顔の処が すすきの穂』という句が彫られている。これは、芭蕉が元禄7（1694）年夏、膳所の義仲寺に在在中、大津の能太夫本間主馬の宅に招かれて、能舞台の壁に張ってあった骸骨の能を演じている画に画賛を入れたときの句である。『続猿蓑



乗空建立の句碑

下巻』にも収められている。

後にこの句碑も風雪のために摩滅し句を判読し難くなったため、昭和63年秋、新たに当寺に伝わる原本の文字を刻んだ句碑が建立された。これは江口在任の俳人、

三原映月氏の寄贈によるものである。



三原映月氏寄贈の句碑

また、平成14年7月には、新たに開通した日本海東北自動車道（新潟空港IC）〜聖籠新発田IC間）の豊菜SA（下り線）に、林徳寺の芭蕉句碑を紹介する石碑が建立された。これは日本道路公団が新潟県から紹介を受けての建立である。

話を戻すが、第13代



ICの芭蕉句碑

住職 諦諦の時代、大正6（1917）年に本堂の屋根を現在の瓦葺きに変える改修工事を行った。

第14代住職 誠諦は書をよくし、江口八幡宮の幟をはじめ多くの作品を残している。お酒を飲んで酔った勢いで、腰を支えられながらその幟を一気に書き上げたなど、逸話の多い住職でもある。この代に「誠心云」が誕生した。

誠諦の娘婿で本来15代になるべき父親と早くに別れた第15代住職 誠慧（現在の前住職）は、第一次世界大戦直後という時代に若くして住職となり、苦勞が多かったことと思う。その中で昭和45年庫裏新築、昭和62年本堂屋根瓦葺き替えと内陣の荘厳整備など多くの工事を行った。そのほか墓地の整備も行うなど、現在の林徳寺の基盤を築いた中興者である。

また同じ誠慧の代である昭和55年には、戦争で供出し失われていた梵鐘を、新潟市西野高橋熊次郎家と新潟市江口星山幸松家による寄進によって、再び鐘楼門に設置することができた。この際は、稚児行列を行って盛大に慶讃法要を厳修した。これ以来年々除夜会の参拝者が増え、200名近い方が除夜の鐘を撞く姿が見られる。

平成8年には、現在の第16代住職 誠祐の住職継職を記念して盛大な慶讃法要を執り行うと共に、



親鸞聖人像

親鸞聖人像を境内に建立した。また平成13年には山門前に寺号碑が建立されるなど、順次、伝統ある寺にふさわしい設備を整えながら現在に至っている。 <終わり>

関東ご旧跡団参旅行の報告

平成14年5月23日から25日にかけて、林徳寺・誠心会団体参拝を実施いたしました。
約50名の方に参加いただいたの旅行でしたが、親鸞聖人のご旧跡を訪問すると共に、多くの名所も訪ねる、楽しい旅となりました。その様子を報告いたします。

5月23日(木) 午前7:00 林徳寺前をバスにて出発 → 高田山専修寺参拝 → 稲田御坊参拝



5月24日(金) 借楽園 → 西山荘 → 袋田の滝 → 五浦温泉



5月25日(土) 白水阿弥陀堂 → 塩屋碇 → 小名浜 → あぶくま洞



日本語になった仏教の言葉

③

《縁起》

「縁起」という言葉、たいていは吉凶の前兆に使われている。「縁起をかつぐ」「縁起でもない」といった風に使われることが多い。しかし、仏教語の「縁起」の正しい意味は、

― 因縁生起 ―

である。すべての物事は「因」と「縁」とから「生起」する、というのが「縁起」なのである。物事が生起するための直接原因が「因」、間接原因が「縁」である。ではなぜ仏教では、「縁起」といって縁(間接原因)の方を強調するのであろうか?それは、因の方は言わなくてもわかるからである。

植物が発芽した。それには種子が必要だと言うことは誰にでもわかる。けれども、種子があれば植物は発芽するかといえは決してそうではない。水分が無いと発芽しないだろうし、寒い冬には発芽しないだろうから適当な温度が無いと発芽しない。土も無いとだめだ。そのように、発芽には因(種子)を支える様々な縁(間接原因)が必要であるとされる。そして、縁の方は往々にして見落たのである。そこで仏教では「因縁生起」のうちの「縁」を強調して、「縁起」としたのである。

『日本語になった仏教の言葉』 ひろさちや